

もっと知りたい
ふるさと

55

子安地蔵の口マン

何の変哲もない石造地蔵。気にもかけなかつた野仏の足元から湯釜と陣鐘が出土した。天保時代のことである。噂が噂を呼び、話が広がる。

ついには「武田軍からの軍資金が埋まって…」というところまで広がっていった。しかし、いくら論議を重ねても由緒は不明のまま。約2000年がたつが疑問は解けていない。

「城腰地籍上山田2697番地」付近に東を向き、素朴な雰囲気の中に地蔵が佇む。これは子安地蔵で、胸に抱く赤子、何か語りかけている口元の笑みが愛らしい。婦女子の健康を願う姿が感じとれる。

湯釜も陣鐘も、室町時代末期の作と鑑定されている。陣鐘は直径19センチ程の黄銅製。湯



子安地蔵

釜は最大径25センチ、器高21センチ。そして3つの足を持つ年代物である。現在、上山田平野の篠原幸彦氏宅に大正時代の先祖が書いた諸（書）簡文と共に家宝として保管されている。

出土した場所は現在の位置とは違う。ここは村上一族の支族山田氏が統治しており、応仁時代にその居城があつた。天文22年（1553）4月5日に武田軍によつて陥落した。この付近は「城野腰」の「尾平（御平）」と呼ばれ、山田氏の家臣たちも周辺で農業を営みながら住んでいた。牧場もあつたと伝えられている。陥落後は同じく支族である屋代氏が、居城の一重山城と共に統治していた。

5次にわたる川中島合戦や上杉、北条、徳川との戦いの中で戦火は絶えることがなく、屋代氏自ら城下に放火することもあつたという。

屋代氏の時代には居城を「尾平」より200メートル程登つた天照山普携寺（山田氏菩提寺。現在地より上）付近の山際に定め、弁天池の水を利用して生活基礎を固めた。一方、出城（荒砥城）との連携体制強化

にも力を入れた。初代「屋代政国」が入城したのは永禄2年（1559）のことで、逃走した兵や農民の呼び戻しに尽力した。



湯釜と陣鐘

6年（1578）政国が死去し、秀正の代にもこの考え方は引き継がれていく。

天正10年（1582）8月、上杉軍に属していた秀正は離脱を決意。その前に法華寺の一重山城下（屋代神明町）への移遷を実行した。国分尼寺からの仏像薬師観音菩薩のみの移遷で「寺のすべては普携寺に預けよ」との父政国の命に従つたものである。法華寺は後年、未曾有の豪雨と鉄砲水で流失して跡がない。今は法華寺沢の名のみが残っている。

薬師観音菩薩が去つたあと、陣内に残された湯釜と陣鐘は共に仏具の一種ではないか。陣鐘の音はブツダの死の直前、動物達の悲しむ声だという。寺と村上・屋代の名を残すため、戦火の犠牲者を弔うため、子安地蔵にこれらを託したとすれば考えすぎなのだろうか。

したがって、智識寺、山田領の越戸付近の古刹である山王山法華寺、そして隣接する湯の窪を、村上一族の共有資産としていたが、山田氏が去つてからは、屋代一族が管理監督をしようと考へた。天正

「一重山屋代城跡と屋代家文書」



※注

建久8年（1197）源頼朝が善光寺詣での帰路立ち寄り、一族郎党、寺関係者を激励したと言ふ由緒ある寺

参考文献

『上山田町史』『普携寺誌』

上山田 若林甫汎